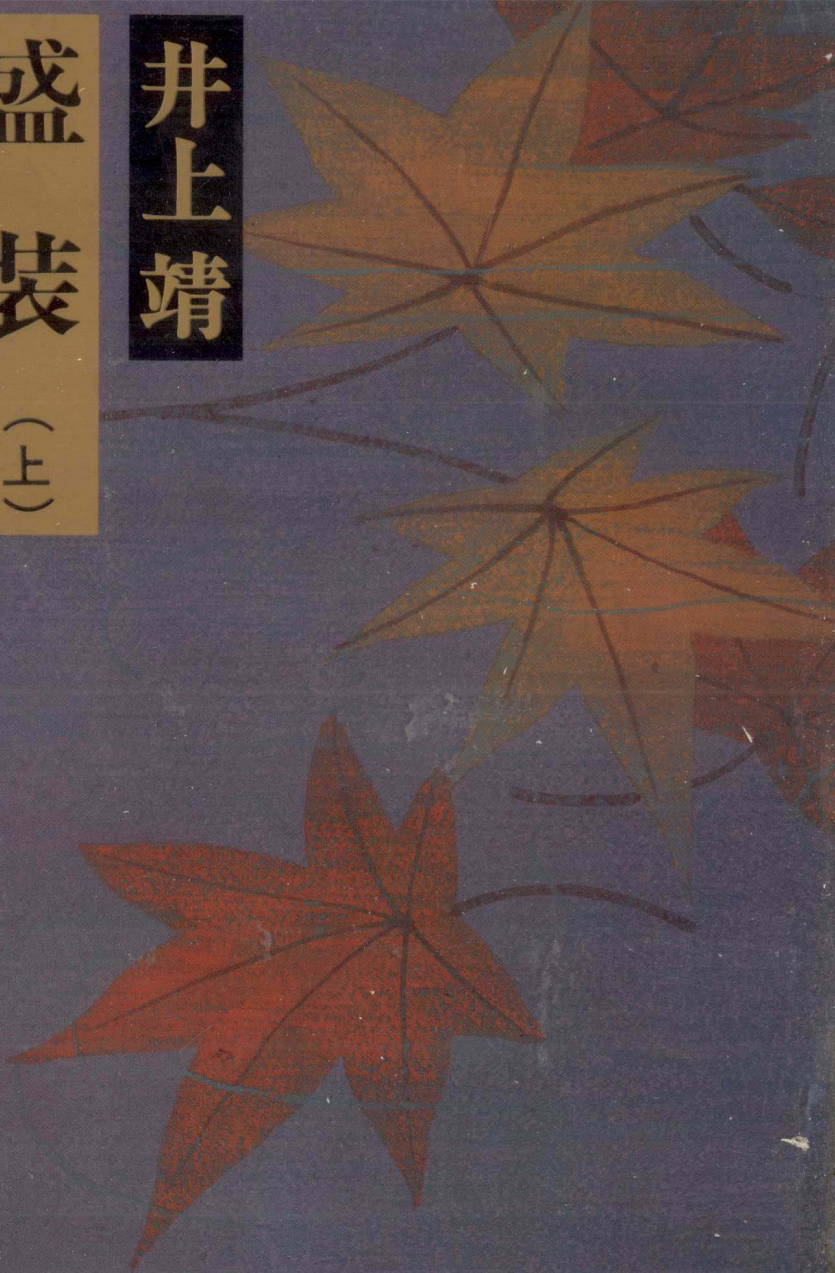


井上靖

盛装

(上)



上靖

装

(上)

文藝春秋

© Yasushi Inoue. 1977

# 盛装(上)

昭和五十二年四月三十日 第一刷

950円

著者 井上靖

発行者 檜原雅春

発行所 株式会社 文藝春秋

郵便番号 (102)

東京都千代田区紀尾井町三

電話(〇三)二六五一一二二

本文印刷 凸版印刷

製本所 加藤製本

万一、落丁乱丁の場合はお取替致します

Printed in Japan

《長篇小説》

盛  
装  
(上)

内容目次

晚夏

205

街角

179

霰

146

高原

108

灯

84

归京

62

海

26

心中

7

夜



259

階段



240



盛  
装  
(上)

装  
幀

平山郁夫

## 心 中

伏木小平太は川崎にある第二工場の従業員食堂の別室で時刻外れの遅い昼食を摂っていた。

正午から一時半までの昼食時間はどうに過ぎているので、百名ぐらいの従業員なら一度に収容できる広い食堂はがらんとしており、調理場の方の動きもひっそりしていた。食堂の椅子は薄い緑色で統一されており、食卓にはこの種の食堂としては珍しく白い卓布がかけられてあった。伏木は工場を見学に来る者があると、この従業員食堂を見せることにしている。食堂の入口にはこれも食事前には必ず手を洗うための広い洗面所が設けられてあ

り、食堂の建物の外側は廻廊風に作られてあって、籐椅子が並べられ、その前の花壇をちりばめてある芝生の広場には、ベンチが音楽堂の椅子のように沢山配されてある。椅子やベンチの置かれてあるところには必ず煙草の吸殻入れが備えつけられてあることも、多少この種の工場としては異った景物であると言えよう。夏になると、この芝生の広場には、海水浴場で見かけるような大型のテントが何個か張られる。

尤もこうした設備は必ずしも従業員のために考えられたことだけだとも言い切れない。椅子やベンチが多少煩わしく思われる程多いのは、休憩時間中に従業員にやたらに芝生の上に腰を降ろして膝を抱えられたり、仰向けに寝転ばれたりするのを避けるためで、主として伏木自身の好みに関係しての設備だと言えないこともない。煙草の吸殻入れのやや神経質と言える程の配置も同様である。そこらにやたらに吸殻を投げ棄てられるのはごめんである。伏木自身拾って歩きたくないかねない。

いま伏木の居る別室の食堂は、従業員食堂に隣り合っていて、伏木自身が週に一回工場を見廻りにやって来る

日以外は、専ら来客を接待する時だけに使われている。平生は工場長も幹部社員も、従業員食堂で、一般従業員と同じ卓で、同じ献立の食事をする事になっている。これもまた伏木小平太の仕事というものに関する考え方から来ている。一線で働いている以上、仕事場に於ては上も下もない筈である。仕事場は戦場である。指揮者が別室で贅沢なものを食べていて戦争に勝てるであろうか、社長になってからは別だが、伏木自身、長い間、そのようにして来たのである。

伏木はパンをちぎってはバターを厚めに塗って、口に運んでいた。皿の上には鶏の脚の揚げものが載っているが、その方にはなかなか手がつけられない。伏木と対<sup>むか</sup>い合<sup>あ</sup>って工場長の藪内が坐っており、もう一組対<sup>むか</sup>い合<sup>あ</sup>っているのは、本社の庶務部長の船岡と、この第二工場の庶務課長の江沢である。伏木以外の者は、フォークとナイフを慎重に静かに動かしている。手術着を着ていないだけのことで、その手付きは外科医のそれであり、その緊張の度合も、またひどく厄介な手術に携っている外科医と何も変らない。

伏木はパンをちぎっては口に運び、その度に眼を窓の外に向けていた。一週に一度ここで食事をするが、このころ来る度に若葉が見違える程大きくなっている。仕事もこんな風に行かないものか。伏木はそんなことを考えていた。

伏木は自分の前の料理に眼を遣<sup>や</sup>り、初めてそれに気付いたように、フォークとナイフを取り上げたが、あとは自分のテンボでゆっくりと肉のかけらや野菜を口に運んでいた。船岡と藪内はどうに自分の料理を片付けてしま<sup>ま</sup>って、二人とも申し合わせたように、手を卓の端にのせ、顔を窓の方に向けている。江沢だけが、伏木に付き合っているつもりか、いつまでもフォークとナイフを動か<sup>か</sup>し続けている。

こまぎれにした皿の上の料理を、江沢はフォークの先端に突き刺して口に運んでいる。

「何とかならんかな」

突然、伏木は言った。

「何でございましょう」

江沢が訊いた。

「道だよ。ひどい道だ」

「はあ、工場の前の道ですか」

「いや、日本国中の道だ。まるで沙漠だ」

「はあ」

日本国中の道ということになると話題の対象が大きすぎて、何と相槌を打っていいか判らなかつた。併し、それだけで、伏木は再び道のことは話題にしなかつた。暫く沈黙が続いたあとで、

「やめなけりゃ、いかなん」

伏木はまた突然言つて、フォークとナイフを置き、ナブキンで口を拭<sup>ぬぐ</sup>つた。

「何をですか」

こんどは藪内が訊いた。

「バスにあんなに詰め込んではいかん。運んでやるんだから文句を言うな、まるでそう言つてゐたいだ」

「いけません、全く、あれは」

藪内は言つた。すると、横から船岡が、

「小学校の子供たちなど可哀そうな時があります。やはり婦人と子供専用のバスが要ると思います。東京ばかり

かと思ひましたら、この間大阪へ行つて驚きました」

船岡が言いかけると、

「バスにはバスだが、君、僕の言つてゐるのは会社のバスのことだ」

伏木は言つた。

「会社と言いますと、自社の——？」

江沢が訊いた。

「そう」

「はあ。あれでございますか」

「何とかしろよ、ひどいよ」

「はあ」

「見た眼にもよくない。幾らただで駅まで運んでやると言つても、あれじゃ、君、誰も余り有難く思わんだらう」

「はあ」

「それから車体が汚ない。内部へはいったことがないから知らんが、外から見る限りに於ては、余りいい会社の宣伝にはならんね」

この時、秘書課の若い社員の安原弘がはいつて来て、

伏木の横に廻ると、身を屈めて、

「お宅からお電話でございます」

と言った。

伏木は席を立つと、部屋を出たところに置かれてある受話器を取り上げて、

「伏木だが、家からの電話をこちらに廻して貰いたい」と言った。やがて、交換嬢の声に替って、妻の索子さくこの声が聞こえて来た。

「あなた、大変！」

それだけ言つて、息でも呑んでいる風で、索子の声は切れた。伏木は受話器を置いて、ズボンのポケットからビースの箱を取り出し、そこから一本抜いて、それにライターで火をつけた。伏木は索子が口にする大変という言葉にはさして動じなかった。妻の大変という言葉にいちいちその言葉の要求する反応の仕方をしていては身がもたなかった。花壇の薔薇の花が散つても、大変だと言うし、蚊に食われても大変だと口走る。

「何が大変だ？」

伏木は受話器を取り上げると同時に言った。そして、

そういう言葉を口に出しながら、眼で秘書の安原の姿を探していた。電話を終えたら、すぐ階下へ降りて行って、そこから自動車に乗りたかった。索子の電話は長いかも知れなかったので、先に自動車の用意を命じておこうと思う。

「わたし、よく言えないわ。気が動顛どうてんしているんで」

そんな妻の言葉に対して、

「ちょっと」

伏木はそれだけ言つて、また受話器を置いた。そして向うからやつて来た安原に、

「すぐ本社へ帰る。くるまを玄関へ廻しておいてくれ」

「承知いたしました」

「くるまの中で珈琲を飲む」

「はい。——魔法壇にでも？」

「それしか仕方がないだろう」

「承知いたしました」

「珈琲はやめて、煎茶にする」

伏木は言い直した。

「珈琲と、お茶と両方、御用意いたしましたしょうか」

「そうがぶがぶ飲めやしないよ、君」

「はい」

安原はすぐ調理室の方へ足早に歩み去って行った。伏木は受話器を取り上げた。すると、いきなり索子の泣き声はいって来た。伏木はおやと思った。索子の泣く声を聞くのはいつからのことであろう。泣くというような女であることを感じさせる機能を失くしてから、少なくとも二十年は経っているであろう。伏木は驚いた。索子でもまだ泣くことがあるかと思った。それにしても、ひどく迷惑な感じである。

「どうした？」

すると、泣き声は怒りの声に変った。

「聞いていらっしゃるの？ いらないの？」

「聞いている。——いま、ちょっと安原君に用事を頼んでいた。初めから話してくれ」

「瑟子が心中しました」

いきなり、索子のそう言う声が聞こえた。

「何！」

それから、

「もう一度言ってくれ。心中とは何だ、心中とは」

「瑟子が心中しました。そういう電話が警察からはいりました」

索子の声はすぐ嗚咽おえんに変った。

伏木は索子の言う言葉の意味がまだはつきりとは呑み込めなかった。いま索子の口から容易ならぬことが自分に告げられているということは判っていたが、さて、その容易ならぬことの実体がよく判らない。

「落ち着いて、ちゃんと言え」

伏木は嗚咽おえんした。それに対する索子の言葉は聞こえず、また嗚咽が聞こえて来た。

「瑟子がどうした？」

「心中しました」

「心中、誰と!？」

「そんなこと知りません。いま警察から電話があった許りです」

「死んだのか？」

「——でしょう。心中したんだから」

また嗚咽があとを埋めた。

「心中って、どこで心中した？」

「判りません。ただ、そういう電話があっただけです」

「それじゃ、何が何だか判らんじゃないか。ばか！」

伏木はめったに大声は張り上げないが、この時だけは咬みつくような言い方をして、

「すぐ警察へ電話をかけろ。そしてすぐこっちへ連絡してくれ」

「それよりすぐ帰って下さい」

「帰る！ 帰るが、その前に警察へ電話をかけて、様子をこちらに報しやうせてくれ。俺はここに居る。さ、すぐかけてくれ」

「どこへかけるんです」

「警察から電話があったんだらう」

「それ、どこの警察でしょうか」

「そんなこと俺が知るか。君が受けたんだらう」

「それより、あなた、すぐ帰って下さい。そして、あなた、かけて！ わたし、厭いとです」

「探してかけろ。すぐかけろ。何と言ってもかけろ」

伏木は荒々しく受話器を置くと、指に挟んでいた煙草

を受話器の横の灰皿の中にすり潰し、すり潰してから、また新しい一本に火をつけて口にくわえ、それからまた受話器を取り上げると、

「伏木だが、家へ電話をかけてくれ」

と言った。受話器を置いて暫くするとベルが鳴った。

「お家の方はただいまお話し中でございます」

交換嬢の声がいやに冷静に、伏木の耳に響いた。伏木はいらいらした気持で二、三分の間そこに突っ立っていたが、また受話器を取って、家への電話を催促した。すると、すぐ、まだお話し中だという交換手からの返事があった。そこへ安原がやって来て、

「くるまの御用意ができております」

と報せた。伏木は何となく電話はすぐには繋がりそうもない気がして、

「よし、行く」

そう安原に言った。そして食堂へ戻ると、そこに居た本社の船岡の方へ、

「僕は家に急用ができたので、これから家の方へ帰る。そう会社の方へ連絡しておいて貰いたい」

と言った。

「さっきの社のバスのことですごくありますが」

江沢が言いかけると、

「あとで、あとで」

伏木は右手を上げて江沢を制すと、その部屋を出て、入口に待っているくるまの方へ歩いて行った。

くるまは京浜国道を走った。いつものことであるが、前も背後もくるまで埋まっている。くるまを数珠繋ぎにした何本かの鎖が、停まったり、動いたりしながら、不器用に巻き取られて行くのに似ている。

瑟子が心中したとはどういうことであるか。心中などするような娘ではない。何かがどこかで間違っている。

伏木は口を固く結び、眼を一点に据え、いつもより寧ろ傲岸な顔つきをして、腕を組み、胸を反らせていた。仕事の上でも、苦境に立ち到った時は伏木はいつもこのような顔をし、このようなふんぞり返り方をする。自分を好ましくない状態に突き落そうとしているものを睨み据えている顔でもあったし、事実またそのような気持でもあった。

心中とは何だ。心中とは男と女が一緒に死ぬことであろう。女と女が死ぬこともあるが、まあ、大体に於て心中と言えば、男と女の場合が多い。瑟子が誰か男と死んだと言うのであるか。ばかな！ 大体瑟子は男の友達など持っていない。いや、持っていないと自信を持って言えるか。持っているかどうか、そんなことは知らんが、持っていない筈である。瑟子は男なんて見向きもしない娘だ。本当に見向きもしないか。見向きかどうか知らんが、見向かない筈である。男を見向くような娘には少なくとも俺は育てていないのだ。

伏木はひどく廻り道をして考えていた。仕事の上ではいつも速決主義で押し通し、裁断の早いことで知られていたが、いまの場合、妙に一つの事を考えると、その考えに水を差すような考えが頭を持ち上げて来ていた。

いま、男を見向くようには育てていないと考えた。だが、育てると言うことはどういうことであるか。本当を言うとき、育てたことなどないのではないのか。一日のうちで顔を合わせるのには極く短い時間だ。朝早く家を出て、夜遅く帰る日などは全然顔を合わせていない。むしろ顔

を合わせない日の方が多いのではないか。顔を合わせないくらいだから言葉も交さん。そういう見方をすれば、索子に任せ放しである。その点はなっていない。

「社長、お茶をお飲みになりますか」

運転手の横に坐っている安原が言った。

「うん」

伏木は唸った。すると、もうすでにお茶を注いであったと見えて、安原が煎茶を入れた珈琲茶碗を差し出して来た。

「要らん」

伏木は言った。

「飲みたくない」

「では珈琲になさいますか」

「飲まん」

「では」

安原は茶碗を持った手を引つ込めた。その時、

「ばかもの！」

そんな言葉が伏木の口から出た。

「は？」

安原が大きな声を上げた。

「君のことではない」

伏木は言った。育てたか、育てぬか、俺は知らん。併し、心中するとは何ごとか、ばかもの！伏木はくるまが停まる度に、少しずつ狂暴になりつつある自分を感じていた。

くるまは品川へはいり、高輪の台地にある住宅地の一角で停まった。家の門の前でくるまを降りると、玄関から門の方へ走って来る下駄の音がした。安原が外から小門を開けると、内部から索子が出て来た。

索子は安原から夫の鞆を受け取ると、

「結構でございます。もう、ここで」

と言った。安原も自動車の中の伏木の様子から、何となく伏木の身辺に事件でもあるのを予感していたらしく、

「では」

と言って、あっさりそこから引き上げようとした。

「御苦労」

それだけ言って、伏木は小門をくぐった。索子がすぐそれに続いた。伏木は玄関の土間へはいるといきなり、